第 336 回　京都市考古資料館文化財講座 / アスニー京都学講座　　2023 年 6 月 24 日

発掘調査から見る仁和寺

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所　渡邊都季哉

はじめに

仁和寺は、仁和４年（888）、宇多天皇（在位 887 ～ 897）によって建立され、明治時代まで代々皇族が住職（門跡）を務めた真言宗の寺院です。平安時代から鎌倉時代にかけて周辺に多くの院家（関連寺院）が建立されて、栄えましたが、室町時代に応仁の乱で境内全域が焼失・荒廃しました。現在の仁和寺の景観は、江戸時代前期に行われた復興・再建によるものです。今回は地下に眠る過去の仁和寺について紹介します。

１．平安時代～鎌倉時代の仁和寺

Ａ．仁和寺境内の調査

調査１：工事中に遺物を発見

調査２：八角円堂の基壇南辺・南西辺を検出。一辺は 10.6m（35 尺）。花崗岩の隅束石と裏込めを検出。栗栖野瓦窯産の緑釉瓦が出土。

調査３：溝状の遺構を伴う築地跡を検出。円堂院の東限を区切るものか。

調査４：八角円堂の東側で僧房跡を検出。僧房は梁行４間・桁行 15 間の南北方向の建物。北に対して若干西に振れ、八角円堂の方位と異なる。

調査６：平安時代後期から鎌倉時代の築地状遺構と溝を検出。寺域を画する築地と溝の可能性。

調査 10・11：江戸時代の整地層の下から平安時代の土塁状の遺構を検出。

表１　仁和寺略年表

西暦	和暦	事項
886	仁和２	光孝天皇の御願によって大内山のふもとに寺院の建立が着工される
888	仁和４	宇多天皇が仁和寺を建立する
897	寛平９	宇多天皇が退位し、上皇になる
899	昌泰２	宇多上皇が仁和寺で落飾し、法皇になる
904	延喜４	宇多法皇が仁和寺に御室を造営
931	天暦４	宇多法皇が崩御
983	永観元	円融天皇の御願によって円融寺が建立
998	長徳４	一条天皇の御願によって円教寺が建立
1055	天喜３	後朱雀天皇の御願によって円乗寺が建立
1070	延久２	後三条天皇の御願によって円宗寺が建立
1119	元永２	金堂などの伽藍が焼亡する
1130	大治５	待賢門院璋子の発願で法金剛院が建立
1369	応安２	大雨によって仁和寺が倒壊
1468	応仁２	応仁の乱、東軍の攻撃で仁和寺が焼失
1591	天正19	豊臣秀吉が860石の朱印地を寄進
1634	寛永11	覚深法親王が江戸幕府に仁和寺再建を申請、許可される
1646	正保３	仁和寺の再建が完成
17世紀後半		野々村仁清が門前の竪町に築窯する
18世紀後半		富くじを開始する
1867	慶応３	純仁法親王（仁和寺宮嘉仁親王）が還俗し、皇族による門跡が断絶
1887	明治20	火災により御殿地区の多くが焼失する
1994	平成６	「古都京都の文化財」として、ユネスコの世界遺産に登録

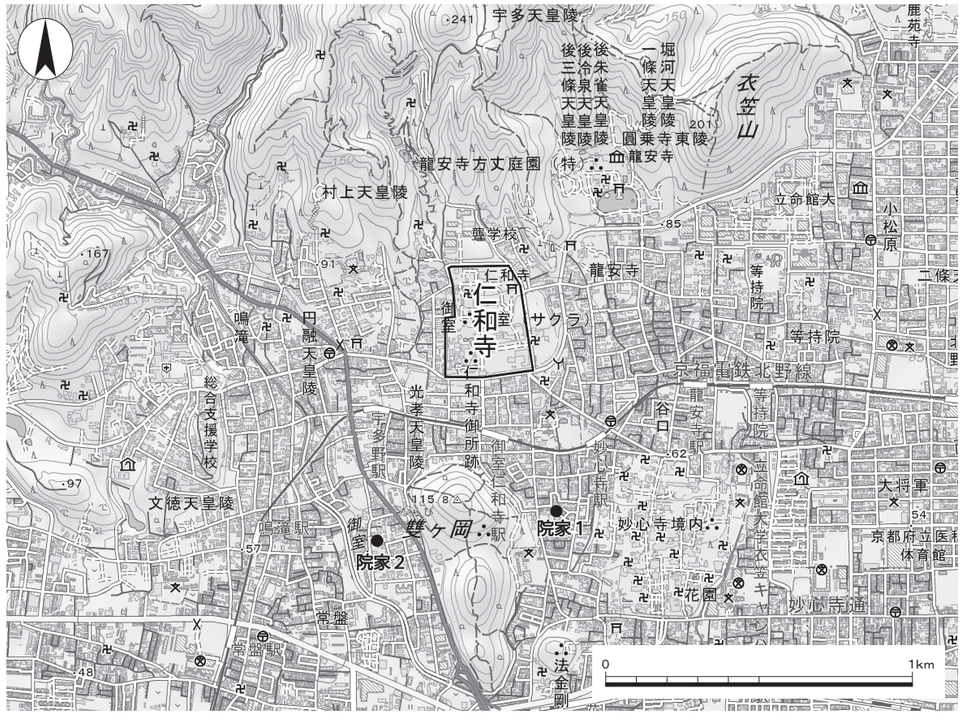

図1　仁和寺の位置（1:20,000）

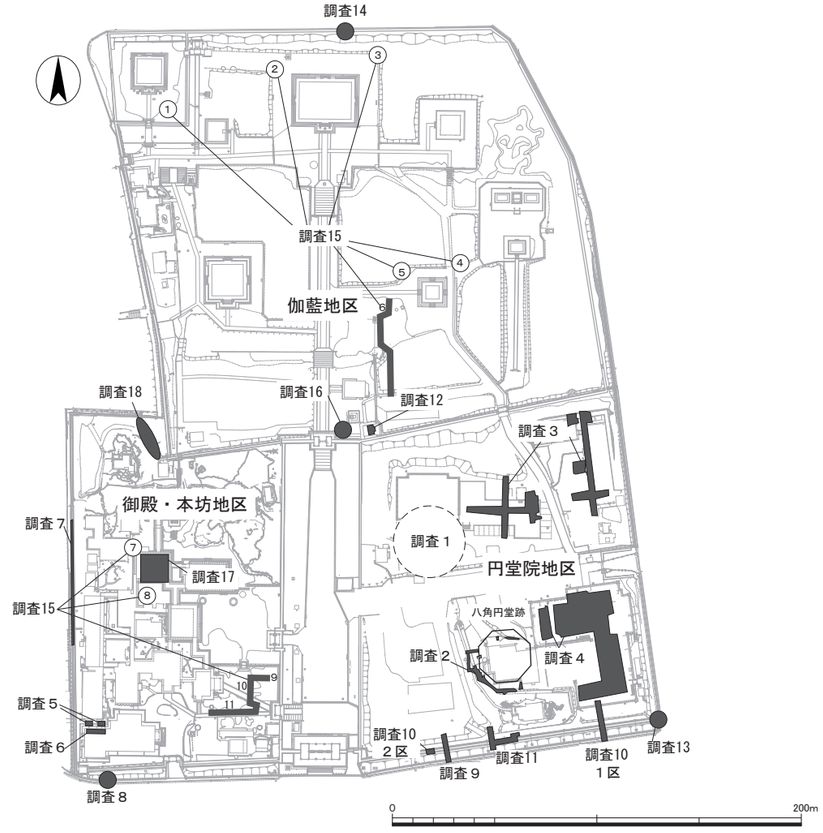

図２　仁和寺境内の調査地（S=1:3000）

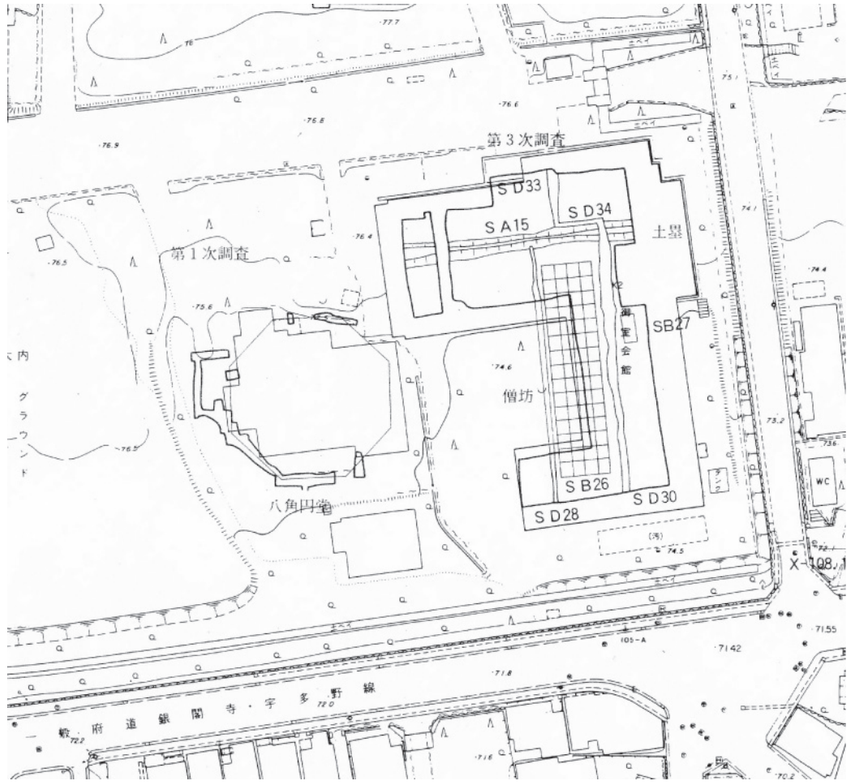

図３　調査１・４　平面図

図４　調査２　隅部写真

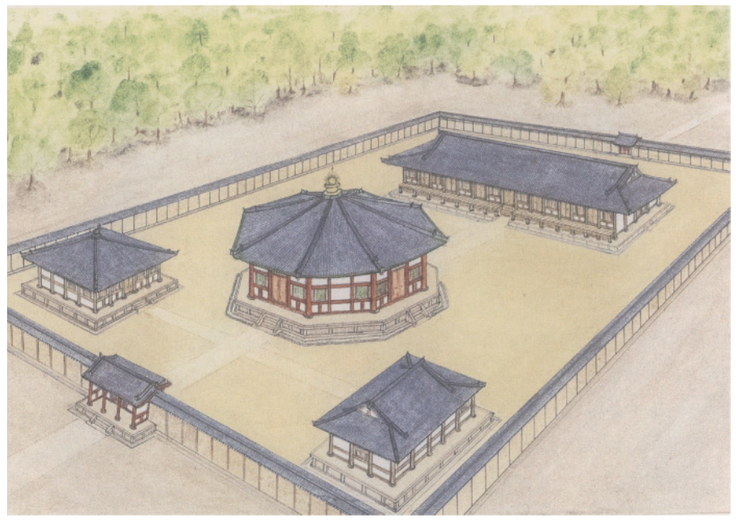

図５　八角円堂、僧房復元図（梶川 2022 より転載）

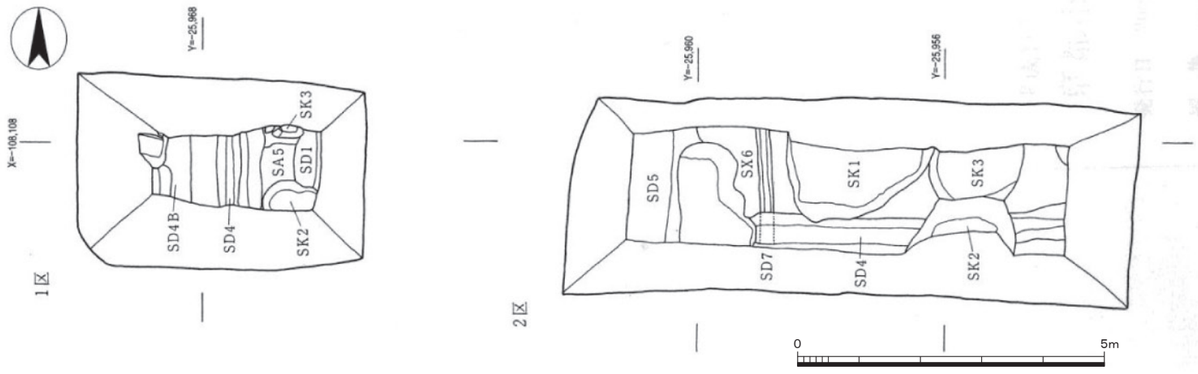

図６　調査５　平面図（S=1:100）

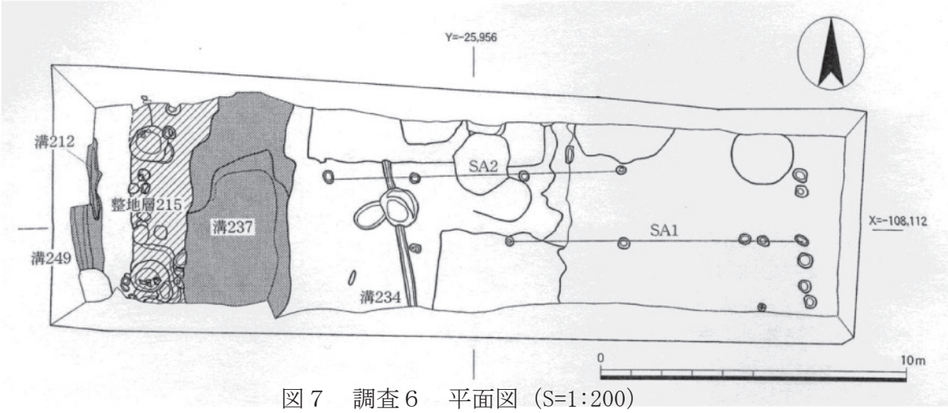

図７　調査６　平面図（S=1:200）

B．御室地域の成立過程

地割の施工：幹線路が地域内街路として整備

平安京北西部の概況：平安時代中期から後期にかけても、いくつかの街路は維持される。

京の内外意識：東寺・西寺の原則に漏れず、京外に位置する。

① 三円寺と院家の始まり（983 ～ 1069 年）

永観元年（983）に円融天皇によって円融寺が、長徳４年（998）に一条天皇によって円教寺、天喜３年（1057）、御朱雀天皇により円乗寺が造営。北院や遍照寺などの院家も成立

衣笠地区や宇多野地区東部など、平安京隣接地域に地割が施工

② 円宗寺の造営と院家群の成立（1070 ～ 1119 年）

円宗寺や仁和寺周辺に浄光院をはじめとする院家が造営、北側には陵墓

双ヶ岡南東部まで地割が展開。同時期に白河殿や鳥羽殿の造営や宇治地域の開発

金堂・食堂・東西回廊・鐘楼・経蔵など仁和寺のほとんどの堂宇が焼亡。円堂院や南御室は免れている。

③ 院家群の展開（1120 年以降）

金堂・鐘楼→回廊・三面僧坊・食堂・新堂→経蔵→観音院の順に再建。所用瓦は各地から搬入

院家（関連寺院）が双ヶ岡西側まで展開。双ヶ岡南東部（JR 花園駅前）に法金剛院造営

C．仁和寺院家群の展開

①院家１の調査（京都市埋蔵文化財研究所 2002）

仁和寺南東、双ヶ岡東側に位置する

礎石の据え付け穴を多数検出、周辺には雨落ち溝がめぐる

東に向かって張り出し部がある。

出土遺物から 11 世紀後半ごろの建築と推定される

頼尊（1025 ～ 1091）によって建てられた院家の一つ「浄光院」の「東千手堂」にあたる

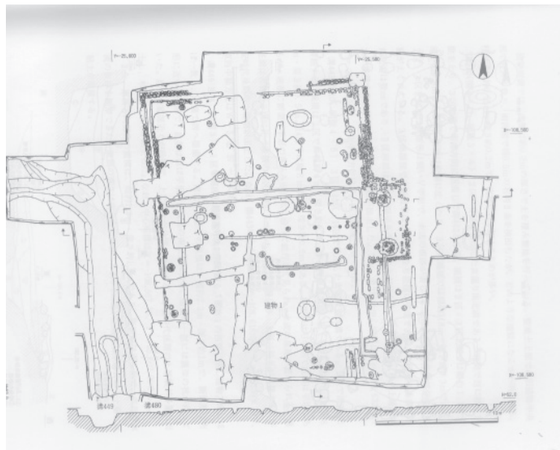

図８　院家１調査平面図

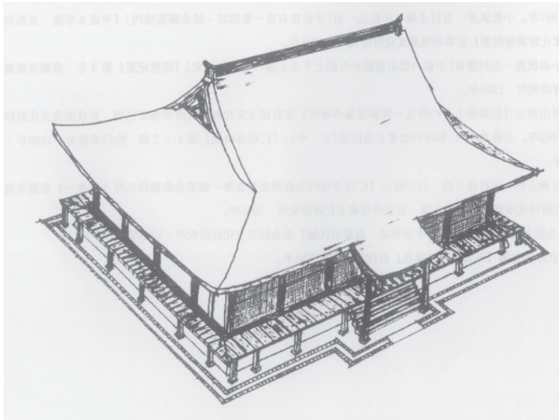

図９　院家１建物復元図

②院家２の調査（京都市埋蔵文化財研究所 1993）

仁和寺南西、双ヶ岡西側に位置する

礎石の据え付け穴を検出、部分的に雨落ち溝を検出

東西５間 × 南北４間の瓦葺きの建物、９尺等間

出土遺物から平安時代後期の建築と推定される

仁和寺の院家の一つ「大聖院」の「寝殿」と推定

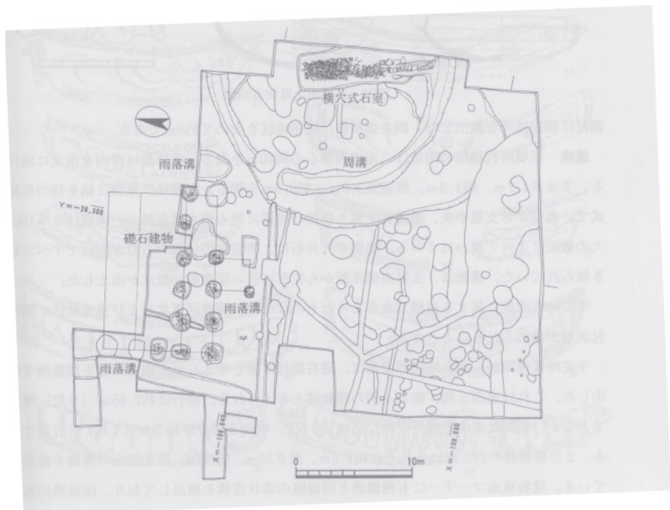

図 10　院家２調査平面図

図 11　院家２建物検出状況写真

③法金剛院の調査（山田邦和 2023 ほか）

仁和寺南東、双ヶ岡南東側に位置する。独立丘陵である五位山を取り込む

鳥羽天皇の中宮待賢門院璋子によって大治５年（1130）から御所・御堂を建立

南側に池が東西 15m、南北 15m 以上検出され、東西には塔や建物が並ぶ。

現存する滝は発掘調査によって、高さが５ m あることが判明。

西京極大路の路面の推定幅は７丈６尺（22.8m）であるが、発掘調査により 11.2m であることが明らかになった。

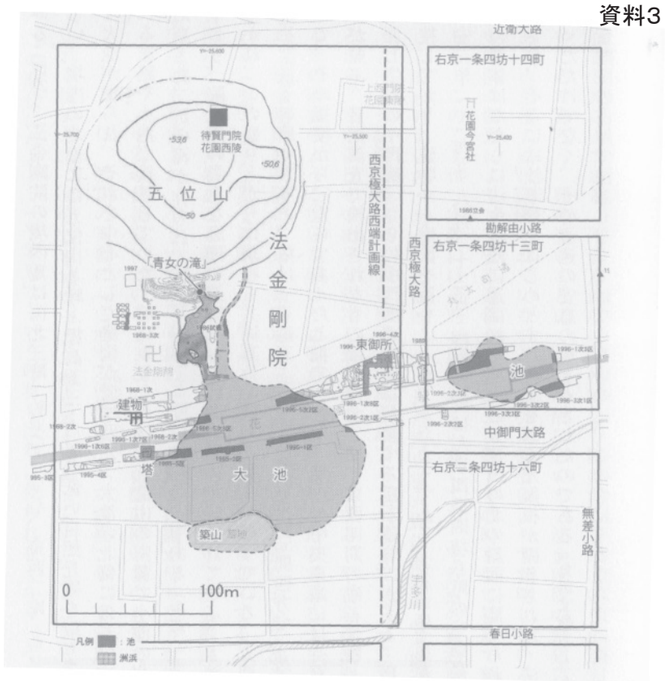

図 12　法金剛院復元図（山田 2023 より転載）

D．仁和寺の権力獲得過程　―横内裕人氏による研究―

①「御室」の認識

僧綱の上に立つ。院権力の仏教政策を支える中心的役割。一方で実務的な行政に係った形跡がない（遁世的な生き方）。など評価が定まらない。

②御室の成立

「御室」の用例では、10 世紀末は居住場所（御所）、11 世紀末は人物に用いられる

仁和寺成立当初は、別当は宇多天皇とその子孫（宇多源氏）が継承。11 世紀初頭に三条天皇皇子性信の入寺により、天皇直系の一世皇子による継承。これにより御願寺の頂点に位置付ける。

性信の前半生は仏教的な活動は希薄であり、宇多天皇以来の、藤原北家（摂関家）を外祖父に持たない後三条天皇・白河上皇院政期になって仏教活動を行い、王家との結びつきを深める。

真言宗寺院の頂点は東寺。一方で御室の弟子である仁和寺出身の僧が東寺の長者になる。すなわち、御室を介した院（上皇）によって、東寺ひいては真言宗寺院全体の人事が左右されることになる。（12 世紀中ごろから）

真言宗成立以来の「東寺 >、その他真言宗系寺院」から、「御室 > 東寺含めた真言宗寺院」へと変化

〈なぜ？〉荘園の寄進の進行などにより各寺院が独自の経済基盤を有するようになる。東寺を頂点とした統制機構が崩壊、東寺の支配から離脱を図る。

→荘園の成立や土地の争いの裁定に院権力とのつながりを持つようになる。

→院の息子である御室に接近

③御室の宗教活動

12 世紀後半以降、王権に密接にかかわる修法は仁和寺が担当、東寺は祈雨が中心に

上皇による密教勢力の統合を、御室を介して行い、動乱期の軍事勢力に対抗する意図

小結

宇多天皇による入寺。院政期になると天皇直系皇子が担うようになり、真言宗寺院を院権力によって、東寺を介してコントロール

２．江戸時代以降の仁和寺

Ａ．江戸時代以降の略歴

覚深法親王による復興の申請。徳川家光による寄進金 20 余万両（慶長年間では金１両＝銀 50 匁＝銭 4000 文）

そば１杯＝６文→１両で 666.66 杯食べることができる

現代のそば１杯＝672 円（総務省統計局 小売物価統計調査（2023 年１月））

→１両＝448,000 円→→20 万両＝896 億円

幕府から寄進された財力を背景に復興事業が行われる。また、御所から建物を下賜される

仁和寺を御殿・本坊地区、円堂院地区、伽藍地区の３つのエリアに分割

金堂：慶長 18 年（1613）に作られた御所の紫宸殿より下賜。それまで使用していた真光院の金堂は高山寺へ

御影堂：慶長期に作られた御所の部材で建築

二王門・中門・五重塔・観音堂・経堂・鐘楼：寛永から正保期にかけて新築

本坊地区：御所から建物を下賜されるが、明治 20 年に罹災、焼失

Ｂ．江戸時代前期以降の仁和寺

〔江戸時代前期〕

調査５：境内南西部で、江戸時代の西面築地と側溝を検出。17 世紀後半に埋没しており、現在の築地は埋没前後に西に８ｍ拡張されている。

調査６：江戸時代の南北方向築地跡と側溝、井戸を検出。江戸前期から中期にかけて、築地部分が石敷路面になる。

調査 16：中門東側土塀際の調査。寛永から正保期にかけて建てられた中門の基礎部となる地業と、作業区画となる石敷遺構を検出。

〔江戸時代中・後期〕

調査７：現在の西面築地と石垣は、寛永期の整地層の上から成立しているものの、出土遺物から江戸時代後期の成立と推定。南半部は明治期の作り替え。築地の下からは暗渠を検出。暗渠は底に平滑な石を並べ、両脇に割石を立てて、上部に蓋石を架ける。

調査８：土塀の内側に南面する石垣を検出。江戸時代末期～明治時代と考えられ、門の内側で虎口を形成していたか。

図 13　調査 16　１区全景（東から）

図 14　調査 11 全景（西から）

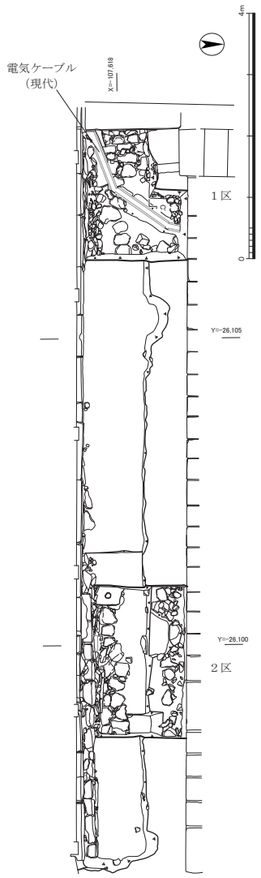

図 15　調査 16　平面図

（S=1：100）

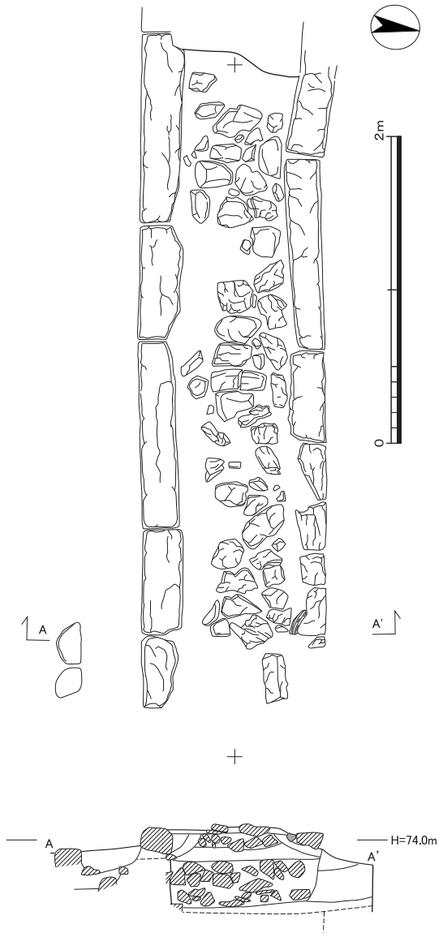

図 16　調査 10　２区平面図・断面図

（S=1：40）

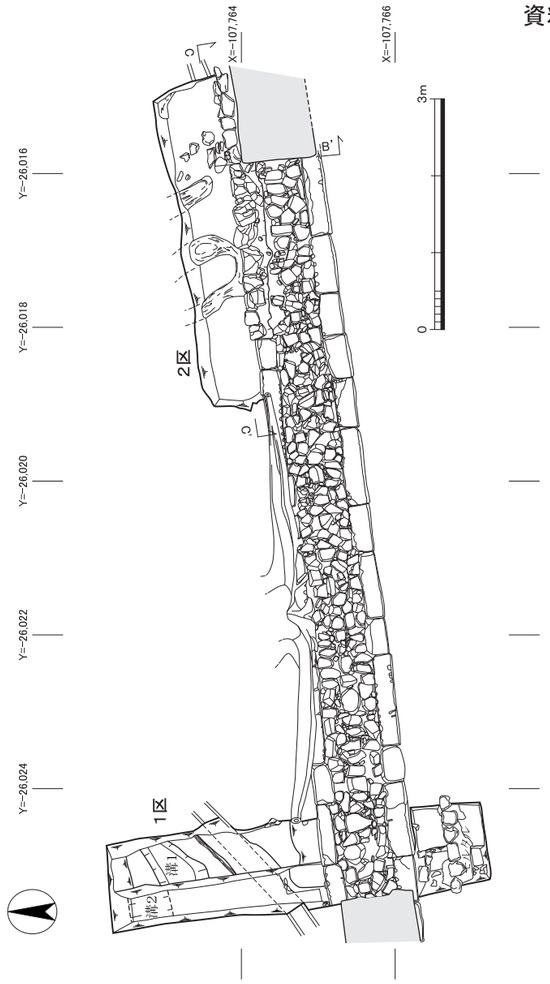

図 17　調査 11　平面図

（S=1：80）

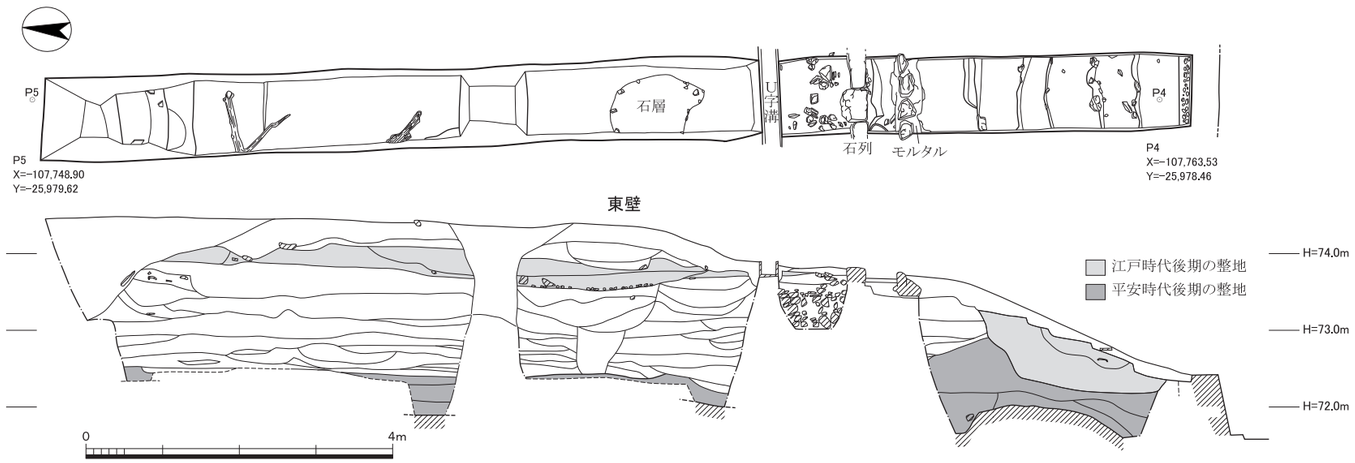

図 18　調査 10　１区平面図・断面図

（S=1：80）

遼廓亭（重要文化財）北東部の調査（調査 18）

遼廓亭とは：仁和寺門前に住んでいた尾形乾山の居宅の一部で、光琳好みの茶室と伝わっている。安土桃山時代の武将織田有楽斎が建てた茶室「如庵」を模倣したといわれている。

尾形乾山（1663 ～ 1743）：呉服商、雁金屋の三男として生まれる。仁和寺門前に住んでいた野々村仁清から作陶を学んだといわれている。仁和寺北西部の鳴滝に窯を開く。

尾形光琳（1658 ～ 1716）：尾形乾山の兄。江戸時代を代表する画家の一人。

石組溝はその背面から 18 世紀後半の土師器皿が多量に出土した。形状から 18 世紀後半ごろのものと考えられる。

調査地一帯で土塀の基礎部分を検出。土塀は残りが良いところで高さ 40cm が残存しており、土塀の基礎部分の両端には地覆石が２列並ぶ。石組み溝を作った後に構築されており、18 世紀後半以降の所産である。遼廓亭から見た、目隠し用の土塀と考えられる。

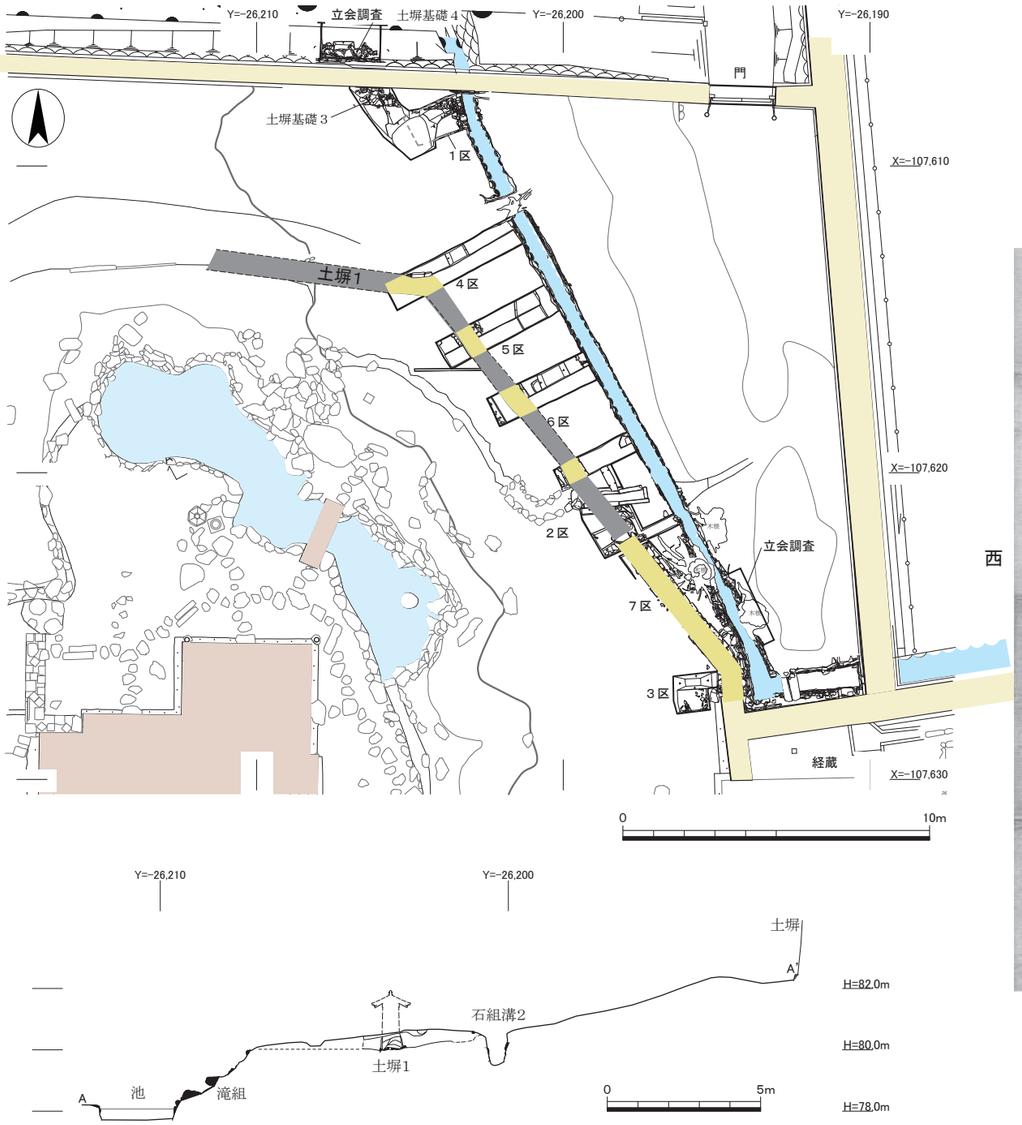

図 19　調査 18　平面図、断面図
（S=1：200）

図 20　調査 18　全景（北東から奥に見える茶室が遼廓亭）

図 21　調査 18　７区土塀１写真
（北西から）

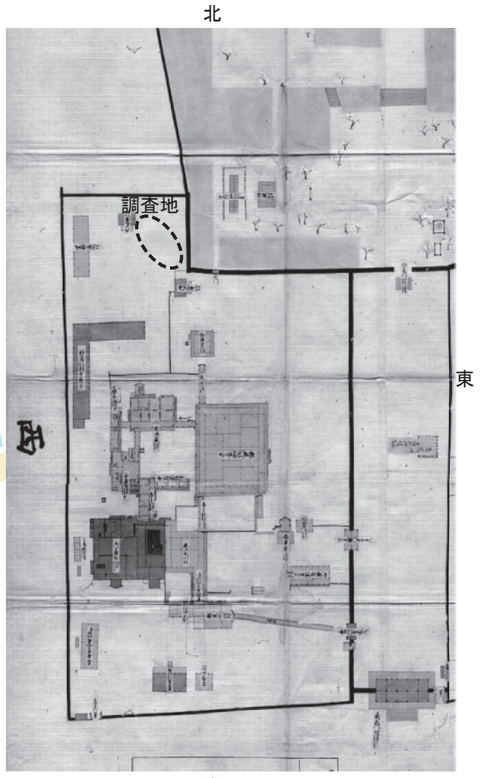

図23「仁和寺伽藍御所惣絵図」
天和3年（1683）　仁和寺蔵

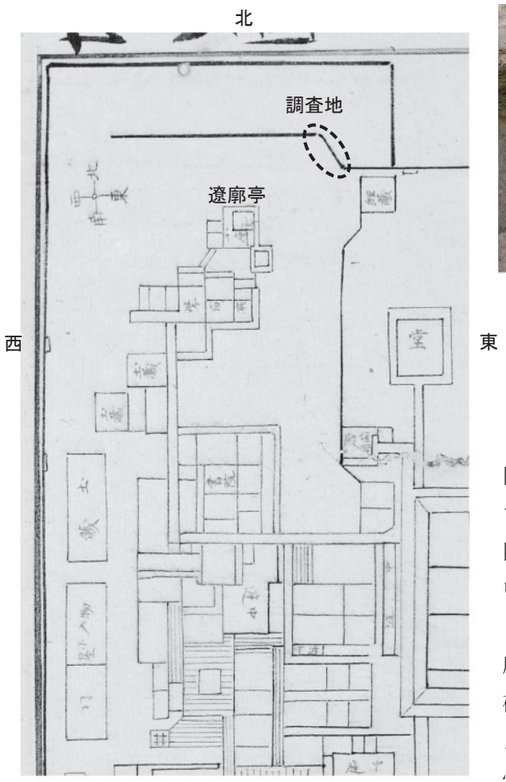

図24「仁和寺門跡建物細図」
明治4年（1871）　歴彩館蔵

図 22　調査 18　５区土塀１写真
（南から）

図 23 は 1683 年に描かれた仁和寺の絵図の一部である。絵図に遼廓亭は描かれておらず、土塀などもないことから、絵図が描かれた時点では遼廓亭は存在していなかったと考えられる。

図 24 は 1871 年に描かれたもので、遼廓亭とともに、北西―南東方向の線描が確認できる。土地を区画する構造物と考えられ、今回検出した土塀を描いた可能性が高い。

土師器皿…江戸時代以前は庶民から高貴な身分の者までが日常的、あるいは儀礼的に使用する器。江戸時代以降、伊万里などの安価な陶磁器が主流になるにつれて、京都以外ではほとんどみられなくなる。京都では昭和まで生産されており、江戸時代からは天皇や公家が有するものとして格式をもつようになる。

→土師器皿の生産地は岩倉幡枝に 40 軒、上嵯峨八軒村に 9 軒、深草村に家 150 軒『京都御役所向大概覚書』(1717 年)

格の高い寺院だからこそ江戸時代になっても多量に出土したととらえることができる。

C．幕末・明治・大正時代の仁和寺

調査９・10：二王門東側の調査。太鼓土塀を解体。南門設置のために版築土塀が開削された痕跡として土塀の西側断面に木口が認められ、調査区南側で検出した階段状遺構は南門に伴う可能性。太鼓土塀の基礎部の延石はモルタルやコンクリートが目地に詰められており、近代以降に作られたことが判明。

調査 17：黒書院床下の調査。黒書院は明治 20 年の火災後の建築。現在の黒書院が安井小学校講堂から移築される以前の黒書院の礎石据え付け穴か

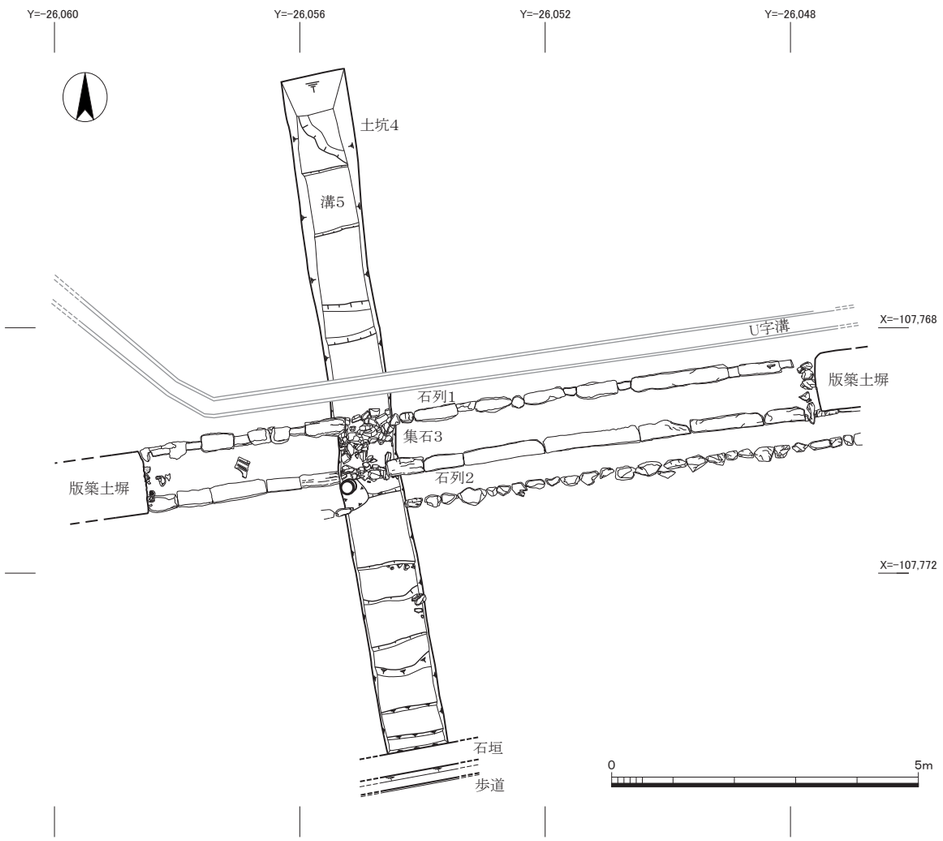

図 25　調査９　平面図
(S=1:100)

図 26　調査 17　全景写真（南西から）

図 27　調査 17　土坑群写真（北から）

図 28　調査 17　礎石 20 写真
（北西から）

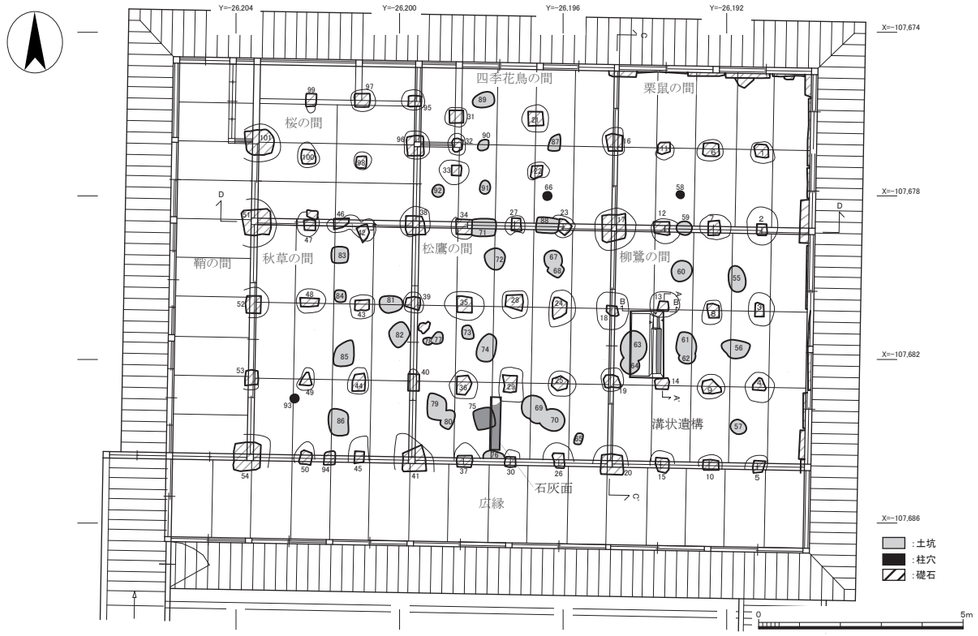

図 29　調査 17　平面図（S=1:150）

まとめ

平安時代・鎌倉時代

・境内南西部で八角円堂と僧房跡、周辺を区画する遺構が検出された。

・院家が仁和寺周辺に展開、仁和寺を中心として平安京・京都西部が市街地化。←天皇直系の皇子が仁和寺門跡となることで、真言宗寺院を院権力で統括

江戸時代・近代以降

・寛永期の復興期の遺構を検出。

・復興以降も、仁和寺の区画の改築。庭園の造成など活発な造営事業が続く。

参考文献

岡田孝男『京の茶室　西山・北山編』学芸出版　1989 年
上村和直「御室地域の成立と展開」『仁和寺研究　第４輯』財団法人　古代學協會　2004 年
梶川敏夫『新版　よみがえる古代京都の風景』公益財団法人京都市生涯学習振興財団　2022 年
久保智康・朝川美幸『もっと知りたい　仁和寺の歴史』東京美術　2017 年
山田邦和『変貌する中世都市京都』京都の中世史７　吉川弘文館　2023 年
横内裕人「仁和寺御室考：中世前期における院権力と真言密教」『史林』79-4、史学研究会　1996 年
宗教法人　仁和寺『史跡仁和寺御所跡保存活用計画』2021 年